崇城大学　紀要
第41巻　平成28年３月

ヨナスのハンマー・ハイデガーのハンマー

清水 俊*

Hammer of Jonas and Hammer of Heidegger

by
Shun SHIMIZU*

要　旨

ハンス・ヨナスは『責任という原理』において、未来世代までをも対象に含めた、責任を中心とした倫理の必要性を訴えた。ヨナスは、存在は存続を目的としているとする存在論から、人間も存続を目的としていると考えた。ヨナスはハイデガーの存在論に影響を受けており、共にハンマーの目的について考察している。ハイデガーがハンマーとの交渉においてハンマーの目的と出会うと考えたのとは異なり、ヨナスはハンマーの目的は作るときに与えられるとした。このヨナスのハンマーにおいては、目的の変化や付加の可能性が考慮されていない。ハイデガーの存在論も人間を通してしか見られないものであり問題があったが、参照すべき点もある。目的もまた変化するものなのかどうかを、ヨナスは考えるべきであった。

Key Words:　目的、存在論、責任

１．はじめに

ハンス・ヨナスは『責任という原理』（*Das Prinzip Verantwortung*）において、責任を倫理学の原理とし、未来世代に対してまでも倫理的対象に含めるべきだとする理論を展開した。未来世代は現代世代に対して受けた恩を返すことができず、何かを要求することもできない。それでも一方的に現代世代が未来世代に対して責任を果たさなければならない根拠としてヨナスは、人類が存続の危機にあることをあげる。人類の存続を犠牲にすることは許されず、そのためには未来世代のために現代世代が責任を果たさなければならない、とヨナスは考えるのである。

ただし、ヨナスは無条件に人類が存続すべき、と考えたわけではない。多くの形相は消失してきており、人間の存続も永遠であるとは考えられない。現在私たちが考えなければならないのは、人類を存続させるべきかどうかというよりは、人類の消滅を先延ばしにするべきかどうか、という問いなのである。

その問いに対してヨナスの出した答えは、存在は存続している以上、存続を目的としており、それぞれの形相も存続を目的としている、とい

*崇城大学非常勤講師

うものだった。人間も形相の一つであり、存続を目指すことにより結果的に存在そのものの存続に寄与することになる。

ヨナスのこの理論には、大きな欠点がある。なぜならば、形相は多様化や消滅もしているからである。[1]事実から目的を推測するならば、形相が存続を目指さずに多様化していくこと、そして消滅することも目的であると考えねばならない。また、存在の存続も永遠ではない。ヨナスも、世界が無になる可能性を考えている。この無である世界を先取りして考えれば、無であること、存在が存在しないことが目的となることも推測できる。非存在にとって存在しないことが目的であるならば、世界のうちには「存在しない」という目的があることも想定しなければならない。

ヨナスの理論における問題点を探るためには、ヨナスが「目的」をどのようなものとしてとらえていたのかを明らかにしなければならない。『責任という原理』においてヨナスはまず、人間に身近なものから存在における目的を考えようとした。最初に考察の対象となったのはハンマーなどの道具であった。そしてヨナスの最初の師であるハイデガーも、『存在と時間』（*Sein und Zeit*）においてハンマーと目的についての考察を行っている。

ヨナスはハイデガーとブルトマンのもとで学び、ハイデガー哲学によってグノーシス主義を解明しようと試みた。『グノーシスの宗教』においてヨナスは、「ハイデガーの下で得た視点、いわばその「光学」（Optik）によって、私はそれまで看過されていたグノーシス思想の諸側面が見えてくることに気がついた」（Jonas, 1991, S.377）と述べている。後にヨナスはハイデガーに対して批判的な立場をとることになるが、グノーシス主義研究時にはハイデガーの存在論を積極的に受容しようとしていたのである。

[1]この点については拙稿「『責任という原理』における多様性の概念」（清水、2007）で検討した。滅びゆく形相がある中、多様であることは全滅を避ける効用はあるが、存続に適した形相が減少、もしくは変化してしまうという弊害もある。そのため多様化が存在の存続に適しているとは一概には言えないのである。

ヨナスは、ハイデガーの考察を意識してハンマーを例に出したはずである。この二人のハンマーに対する考察を比較することにより、ヨナスの目的概念とその問題点について明らかにしていくことが本稿の目的である。

2．ヨナスのハンマーとハイデガーのハンマー

ハイデガーは『存在と時間』においてハンマーと目的の関係について、以下のように考察している。

> ハンマーで打つことは、単にハンマーの道具性格について一つの知識を持っているということのみでなく、この道具には打つことよりもっと適切なことはおよそ可能ではない、という性格が帰せられている。このような使用的交渉においては、配慮の働きはその時に応じて道具を構成している「のために」の下に属している。
>
> （Heidegger, 1927, S.69）

ハイデガーによれば、道具として用いられることにより、ハンマーはハンマーとしてわれわれと出会うことになる。ハンマーをただ眺めるだけではその目的は浮かび上がって来ず、使用されることにより道具はその手元存在性（Zuhandenheit）が明かされるのである。

他方ヨナスも、道具の目的を考察するに当たり最初にハンマーを例に挙げている。ヨナスは、ハンマーの目的について、人間が付与したものとして次のように述べている。

> ハンマーの目的は、ハンマーという概念に属するということができるだろう。ハンマーという概念はあらゆる人工物の場合と同様に、ハンマーの実在に先行しており、ハンマーが出現する原因だった。つまり概念が対象の根底にあり、対象が概念の根底にあるわけではない。（PV, S.107）[2]

ヨナスは、ハンマーの目的はハンマーという概念に属するとしている。しかし同時に、「目的は、この目的のためにしつらえられたハンマーという存在に属している」（PV, S.107）とも述べている。ハンマーに対する考察において、ハイデガーが現存在（Dasein＝人間）と世界との関わり方を重視していたのに対し、ヨナスはハンマーに付与された目的の作用について考察している。ヨナスのハンマーに目的が備わっているのは、人間が目的を与えたからだと言える。

ヨナスにとってはそのようにして目的が付与されることが重要だが、ハイデガーにとってはハンマーの働きによってどのように人間が世界と関わるのかが注目点となっている。また、ヨナスのハンマーは人間の使用以前からハンマーとして存在しているが、ハイデガーのハンマーは人間に使用されることによってハンマーになると言える。

二人が道具について考察するとき、対象が同じハンマーであったのが偶然であるとは考えにくい。ヨナスは、ハイデガーに対して、次のような批判をしている。

> しかしながら存在に対するような、存在とはなぜ人間を含んで育み、自らに関係するいかなることについて人間を通して伝えたいのか、という問いをハイデガーは決して物理学や生物学、進化論を関連させて考えようとはしなかった。われわれに謎を課しているのは純粋に物質的な土台であるにもかかわらず、ハイデガーは「原存在（Seyn）」と名付けて精神的にむやみに高尚にしたものに難問を請け負わせた。
> （PR, S.25）

ヨナスはハイデガーの哲学が「人間を通してみる」という人間からの視点に偏り過ぎており、「原存在」という高尚な概念で存在の基礎付けをしようとしたと指摘している。またヨナスはハイデガーの存在解釈を「実在の具体的な根拠を無視したまま、内面性にばかり目を向けた解釈」であると批判している（PR, S.21-2）。ヨナスはここから、「純粋に物質的な土台」として存在をとらえ、ハイデガーの存在論を克服していこうとしたと考えられる。[3]

ヨナスはハンマーの後に法廷の例も考察し、ハンマーの例と合わせて「両者は一意的に目的形成物であり、目的は人間主体によって指定され保持され続けるということである」（PV, S.114）と結論付けている。ヨナスにおいてもハンマーの目的は人間とかかわりを持つものだが、それはハンマーが人工物であるからでしかない。ヨナスは作られたハンマーを人間がどのように使うかといった、「人間との関わり合い」がハンマーの目的に影響を与えるとは考えなかったのである。

3．ハンマーではないハンマー・ハンマーでなくなるハンマー

しかしここで、ヨナスのハンマーには問題が生じる。ハンマー本来の付与された目的があるとする。その目的を果たせないように作られたハンマーでは、使用者の使い方に関わらずその目的は果たされない。ハンマーの方が次々と作られ、しかも可変的なものである以上、このような事態は避けられない。どれだけ私たちがハンマーの目的を理解していて、そして正しい使い方を実践する能力があるとしても、目的が達成されるためには「ハンマーが目的を達成できるように作られていたならば」という条件が必

[2]以下、*Das Prinzip Verantwortung* の引用時は PV、*Philosophie; Rückschau und Vorschau am Ende des Jahrhunderts* の引用時は PR と略称を用いる。またそれぞれの訳は翻訳書を参照し、適宜修正をした。

[3]しかしながら、ヨナスに対しても「流行遅れではあるが西洋の伝統に対する負債を引きずっている。人間が進化の過程で生み出された最も高貴な被造物であることを彼はまったく疑わない」（Wolin, 2001 p.119）という批判がある。確かにヨナスは「最も乏しいものではなく最も完全なものから、つまり、われわれに近付き得る最高のものから存在とは何かを理解しなければならない」（PV, S.137）とし、人間を「最も高等な有機体」（PV, S.137）と定義している。ヨナス自身も、明確な根拠なく存在のうちで人間を特別視する傾向があるのは留意しておかなければならない点である。

要になるのである。

これに対しては、ハンマーの目的を果たせないものはハンマーとは呼べないのではないか、という反論が考えられる。ヨナスはハンマーという概念の中に目的を見出している。その概念が存在するものだけがハンマーだとすれば、全てのハンマーはハンマーとしての目的を果たせることになる。これは、ハンマーとしての目的を達成できるように作られたものをハンマーと呼ぼう、という私たちの態度表明が要求される事態である。

私たちには何に対しても自由な呼び方をすることができる。しかし私一人が個人的にする呼び方は、対象に対する適切な呼び名とは万人から認識されないであろう。誰もがハンマーでないものに対して私がハンマーと呼んでも、それがハンマーと名づけられたということにはならない。対象がハンマーとしての目的を達成できるものであると多くの人が了解したとき、その対象に対してハンマーであると呼ぶことにする。そうすれば、ハンマーによってハンマーの目的達成不可能である、という事態は避けられる。

このことは、次の事態も引き起こす。私たちがハンマーと呼ぶものはハンマーの目的を果たせるものであり、同時に私たちはそれがハンマーであることを知っているためにハンマーとして使用することができる。つまりハンマーを使用してみてハンマーの目的を果たせると知るよりも先に、それがハンマーとしての目的を果たせるものであると知っていなければならない、ということになる。

私たちは知識としてハンマーの目的を知っており、新しく出会ったハンマーらしきものに対して、ハンマーであろうと推測することになる。そしてその対象がハンマーとして適切に使用できた時、やはりハンマーであったと納得し、ハンマーと呼んでいいものとするのである。しかしこの一連の流れの中には、ハンマーそのものに内在する目的は登場しない。あくまで私たちの目的に対する知識が先にあり、それをハンマーに当てはめている。私たちのハンマーに対する知識と、ハンマーが内包する目的が齟齬を起こすことはない。なぜならばそのようときには、対象はそもそもハンマーではないからである。

では、新しい目的のもとに作られたハンマーはどうであろうか。ヨナスはハンマーの適切な使い方を「ものを打ち付ける」（PV, S.107）と考えている。しかしハンマーはより具体的な目的のもとでも作られる。たとえば、緊急時に脱出するときに使用できるように、窓を破壊するために作られたハンマーもある。しかしこのハンマーは、「打ち壊す」ことを目的としており、ハンマー本来の目的とは別に作られている。そのためハンマーと呼ぶべきではないもの、いわば「ハンマーではないハンマー」となってしまっている。

この「ハンマーではないハンマー」は、私たちが誤ってハンマーと呼んでいるものなのだろうか。それとも、新たな目的を得たハンマーと考えるべきだろうか。さらに、従来の目的のもとに作られたハンマーを、新しい目的のもとで使った場合、それは誤った使い方と考えられるのだろうか。

ヨナスのハンマーの例から見えてくるのは、ある形相に「正しい」目的があると考える場合、新たな目的を持ったものは別の形相と考えねばならないということである。そしてある存在者と別の存在者が同じ形相を有している場合、同じ目的を有していることになる。つまり、私たちは対象が何であるかを知っている時点で、対象の目的も知っていなければならなくなる。なぜならば、目的の異なるものは同じ形相とは言えず、目的が同じであるとの確信があって初めて、いくつもの対象を同じものにカテゴライズすることができるからである。

では、新しい目的に対して従来の道具を使い続ける場合はどうであろうか。同じ道具を別の目的で使い、それでうまくいっている場合、道具を間違って使用していると言えるだろうか。

新しく作られたハンマーの場合は、全く新しい道具であると考えることもできる。別の形相には別の目的がある、と解釈することができるのである。しかしものを打ち付けるためのハンマーが窓を破壊するのに非常に適しており、そのままハンマーを窓を破壊する道具として使い

続けた場合、ハンマー自身は全く形を変えていない。少なくともヨナスのハンマーにおいては、本来の目的とは離れた使用法がどれだけハンマーに適していても、それは間違った目的に基づいた使用法ということになる。私たちの方が道具の使用法を変えても、道具の目的を根本から変更させることはできない。

ヨナスの主張からすれば、道具が作られるときに想定されていなかった目的は、「その場限りの目的」（PV, S.107）ということになる。しかし、道具の使用法が根本から変わってしまうことはしばしば起こる。たとえば刀剣などの武器は、装飾品や祭事の道具へと変化していくことがある。このとき、新しく専用の道具を作るばかりではなく、以前は武器として使われたものをそのまま飾るということもある。そしてこの道具はより装飾品としての価値を保つため、以前の目的、武器としての使用を念頭に置いた手入れが続けられもする。このとき道具自身は形も目的も何一つ変化しないまま、実際には新しい目的によって使用されているという状態が生じる。

ハンマーを装飾品として飾ると想定しよう。ハンマーは鑑賞される目的で飾られるが、ハンマー本来の目的が私たちの美意識を喚起する場合、ハンマーはものを打てる状態であることが重要となる。ハンマーは本来の目的を果たすのに適した状態でありながら、決してその目的を果たすために使用されることはない。しかし、鑑賞されるという新しく付加された目的は常に果たせる状態である。

このとき、ハンマーはハンマーでありながらハンマーではないものになっていると言える。いわば、目的が付加されたことにより二つの形相を持つことになったのである。このような事態において、どちらの目的をもってその対象を理解すべきかを、私たちはどうやって判断すればよいのだろうか。

また、ハンマーに限らず、ある物質が一つの形相だけのために存在しているということは想定しにくい。ハンマーはいくつもの部品から成り立っているが、それらは部品であると同時にハンマーの一部である。ハンマーもより大きな道具の一部になる状況が想定できるが、その時より大きな道具の目的はハンマーと同一ではないが、ハンマーはハンマーとして使用できることが重要となる。私たちがより大きな道具に注視するときはハンマーの目的は見えてこないが、ハンマーを注視すれば、ハンマーはハンマーとしての役割を果たすことが期待されているのがわかる。

このことは、私たちが「あるもの」として見ている対象こそが、目的を果たしている形相とは言えないことを示す。たとえばものを打ち付ける時には、土台がしっかりしていなければならない。ハンマーは確かにものを打ち付ける道具だが、ハンマーだけではものを打ち付けることはできない。よってものを打ち付けるための道具はハンマーと土台のセットであると見ることもできる。しかし私たちは普通、ハンマーだけに注目してハンマーこそがものを打ち付けるための道具だと認識する。ハンマー「は」ものを打ち付けるための道具であるが、ハンマー「こそが」ものを打ち付けるための道具とは言えないのである。

ハンマーは様々な目的のもとに使用されるが、作られたときの目的がハンマーに内在化された目的で、その目的が変化しないとすれば、多くの場面で私たちはハンマーを誤って使用しているか、ハンマーに対する認識を誤っていることになる。ハンマーの目的が人間の概念のみに依存しているとすれば、常にハンマーの目的は変化し、人々の間でも一致することはなく、ハンマーの正しい目的といったものを考察するのも困難になる。それにもかかわらずヨナスはあっさりと、ハンマーの適切な使い方はものを打ち付けることであるとし、それ以上の深い考察をしていない。

4．目的と人間

ヨナスは、ハンマーの概念によってハンマーが作られると考えている。しかし、ハンマーが作られた後にハンマーの概念が変化してしまう、もしくは人々によってハンマーに対する概念が異なる場合、ハンマーの目的がどうなるのかに

ついてヨナスは言及していない。

一度作られたものは別の目的にも使われるという「事実」例を私たちは多く知っている。進化の過程において消化器官の使用方法が変わっていったり、他の消化器官と連関して新しい働きを手に入れることがあるのは、ヨナスも知っていたはずである。少なくともハンマーから他のものへと考察が移る中で、形相における目的の付加や変化の可能性が考えられてしかるべきであったが、ヨナスはそれを怠っている。[4]そして最終的には、存在は存在し続けているので、存続することが目的であるとヨナスは結論付けたのである。

目的の付加と変化の可能性を考えれば、存在の目的に関するヨナスの考えに欠点があることは明白である。なぜならば、存在が存続するという目的を有しているとしても、それが付加された目的、もしくは変化した目的でないとは言えないからである。また、存在に対して目的が付加されたり、もしくは変化することが今後起こるかもしれない。

では、ハイデガーのハンマーにおいてはこの点はどのように考えられるであろうか。ハイデガーのハンマーも本来的な目的は有しているが、それは私たちが道具を使用する中で出会うものである。つまり、道具を使用する以前には本来的なものに出会うための予備知識的なハンマーの目的は知っていたとしても、本来の目的はまだ知らない状態である。そして本来の目的が変化している場合、私たちは道具と出会い交渉することにより、変化した目的を知ることができる。

また、ハイデガーのハンマーは、人間に使用されることによりハンマーになる。よって人間の側が変化すれば、当然ハンマーの在り方も変わる。ハンマーの目的そのものが変化しなくとも、ハンマーの在り方が変われば、目的の意味が変化していくことも考えられる。本来的なハンマーの目的とハンマーの在り方との関係性が変われば、私たちがハンマーの中に見出す目的の生々しい様子も変化しているはずである。

ハイデガーのハンマーは人間とのかかわり合いの中でその存在が浮かび上がってくる。それに対してヨナスのハンマーは、一度ハンマーとして作られればハンマーとしての存在が保証されていると考えられる。たとえ人間以外にはハンマーとして利用できなくとも、「世界のうちにハンマーとしてあるもの」と考えられるのである。

ヨナスは「人間が存続すべきか」という問いを、人間の外側から客観的に考察する必要があった。人間がいなければ成立しない形相について考えても、形相本来の目的を知ることはできない。ハイデガーのハンマーはそもそも人間の存続を前提にした存在者であり、ヨナスにとってその点で問題があったのである。

ではヨナスはなぜ、明らかにハイデガーのハンマーを意識しながら、目的の考察においてハイデガーの名前、そして『存在と時間』に言及すらしなかったのであろうか。『存在と時間』と『責任という原理』におけるハンマーの目的の相違を明確に論じることは、存在の目的を明らかにするうえでも有意義なものとなったはずである。

ヨナスは、『責任という原理』を著した時期にハイデガーの哲学について触れていないわけではない。ヨナスはハイデガーについて、次のように述べている。

> だからこそあの時代のかの深遠な思想家が、褐色シャツ大隊の怒涛の行進に歩調を合わせようとしたとき、彼個人に幻滅したばかりではなく、哲学の敗北すら私の目に映ったのだった。そこではひとりの人間ばかりか哲学もダメになった。（PR, S.26-7）

「かの深遠な思想家」とはハイデガーのことであり、「褐色シャツ大隊」とはナチスのことである。ナチスに加担したハイデガーと、ユダヤ人であるヨナスの関係はうまくいかなくなった。ヨナスは人間としてのみならず、ナチスを支持するような立場はハイデガーの哲学にも傷

[4]ヨナスはハンマーののちに時計、法廷、兵器、歩行、動物の行動、消化器官の目的について考察している。（PV, S.107-145）

を付けたと考えた。

ヨナスはハイデガーの哲学に嫌悪感を抱いている。しかし、『責任という原理』における存在論的考察は、明らかにハイデガーの哲学を意識している。それは、道具の目的について考える際に、ハンマーを例にしている点からもうかがえることである。ヨナスが研究していたのはナチスに加担する以前のハイデガー哲学であり、その中に見出したものと完全に決別したわけではない。

ヨナスはハイデガーの存在論から現存在の影響を排除しようと試み、その成果が『責任という原理』における目的論的な存在論へと昇華されたと考えられる。存在の内にある形相の本来的な目的は、現存在＝人間から引き離される必要があった。しかしハイデガーの影響から、存在における目的の本来性は残った。

問題は、ヨナスの形而上学においては、目的の普遍性を保証するものは何もないという点である。少なくとも『責任という原理』においては、形相の内に宿る目的が不変であること、存在が最初から最後まで存続を目指し続けることを根拠づける記述は見受けられない。ヨナスは形相と目的の関係を固定化して考えたが、目的が変化する可能性についても考察すべきであった。そしてその結果、目的の普遍性が明らかにされることもあったはずである。

人間は自ら滅ぶことを欲しうる。存在の目的が存続であれば、存続を目的としない存在の可能性自体が考えられないはずである。事実から目的を探るというヨナスの方法に従えば、この人間の一例のみをもってしても、存在者のうちで目的が変化する可能性はあることになる。そしてヨナスは人間のうちにあるものは、それ以前の在り方の中にも萌芽があると考えている（PV, S.137）。人間が存続を目的としないならば、他の生物、そして非生物にも存続を目的としなくなる力の源があることになる。そして事実として多くの形相が存続しなかったのであり、その理由を「存続しないことに目的を変更した」と考えても不合理ではないのである。

ハイデガーの存在論は人間を通してしか見られないものであり、ヨナスが求める存在論とは隔たりがあったことは確かである。ハイデガーのハンマーは人間と出会うまではハンマーでないばかりか、存在すらしていないと言える。しかしヨナスのハンマーは逆に、人間から目的を付与されれば、誰に出会わなくともハンマーであり続ける、という問題点がある。

人間-道具の関係性は、人間以外の存在者が他の存在者を道具的使用するときの関係性に投影できるかもしれない。たとえば鳥は樹木を宿り木として利用するが、樹木の方がそれを望んでいるわけではない。鳥の方が樹木を道具的に利用しているのである。しかし鳥にとって樹木は宿り木として必要なものとなり、宿り木としての目的が与えられていると見ることもできる。樹木自身の目的ではなく、鳥の規定する目的から樹木の存在が望まれることになる。時には鳥の都合で樹木に加工が施されることもある。もはや樹木はそのとき、本来の樹木よりは鳥にとっての道具と呼ぶにふさわしいものになっているかもしれない。それでも樹木自身が生きていく中で、自らの元々の目的を捨てるとは考えにくい。樹木は樹木でありながら鳥にとっての道具であり、そのどちらも世界のうちに確かに存在する事実となるのである。[5]

世界を動的に、そして多層的にとらえ、在り方や関係性が変化していく中で目的もまた変化するものなのかどうかをヨナスは考えるべきであった。

5．おわりに

ヨナスは人間の存続について考えるため、『責任という原理』において存在の目的についての考察を展開した。ヨナスは存在論から「存在は存続を目的としている」という結論を導き出したが、ここにはいくつかの問題点があった。

[5]ヨナスは動物に対して、「分節された目的・手段連鎖は、動物の行為には想定できない」（PV, S.119）としている。しかしそれは動物の行為に目的がないことを示しているわけではなく、動物の行為に目的があるかどうかは保留する、という文脈の中での言及である。ただしここから、ヨナスが人間だけが分節された目的・手段連鎖を扱える存在だと考えていたことがわかる。

その一つが、「目的」のとらえ方であった。

ヨナスはハイデガーの存在論から人間的な視点をはぎ取ろうとしたが、結果的に存在者同士の関係性が失われ、目的は形相と結びついた不変のものと考えられることになった。形相の多様化や消滅、質料と形相の関係、存在者同士の関係などはあまり考慮されず、形相と目的の変わらないつながりを想定し、他の可能性について考察しようとしなかった。

ハンマーの例からわかるのは、与えられた目的は常にハンマーの使用にとって最適の目的とは言えず、時には別の目的が最も都合がよくなることもある、ということだった。この例から、ハンマー以外の目的についても同様の事態が生じないか、疑わなければならない。存在についても、最初に有していた目的が今も保持されているのか、他の目的も付加されていないか、今後目的が変化したり付加されることはないのかなど、様々な可能性を考える必要がある。

存在は存続を目的としている、というヨナスの想定が間違っていると言い切ることはできない。しかし『責任という原理』における目的に対する考察には不十分さがあり、ヨナスの理論は人々を説得できるほどの根拠を示しているとは言えない。

ヨナスの議論を深めるためには、ハイデガーの存在論とのさらなる比較検討も有効であると考えられる。その作業はヨナス自身には不可能であり、筆者の今後の課題である。

参考文献

1）Heidegger, M.（1926）, *Sein und Zeit*. Achtzehnte Auflage.

2）Jonas, H.（1979）, *Das Prinzip Verantwortung*. Suhrkamp Verlag. (PV)
（ヨナス(2000)『責任という原理』（加藤尚武監訳）　東信堂）

3）――（2003）, *Erinnerungen*. Insel Verlag.
（ヨナス(2010)『回想記』（盛永審一郎他訳）東信堂）

4）――（1991）, *GNOSIS Die Botschaft des fremden Gottes*. Insel Verlag. (GG)
（ヨナス(1986)『グノーシスの宗教』（秋山さと子他訳）　人文書院）

5）――（1993）, *Philosophie; Rückschau und Vorschau am Ende des Jahrhunderts*. Shurkamp. (PR)
（ヨナス(1996)『哲学・世紀末における回顧と展望』（尾形敬次訳）東信堂）

6）Wolin, R. (2001), *Heidegger's Children*. Princeton University Press.
（ウォーリン(2004)『ハイデガーの子どもたち』（村岡晋一他訳）　新書館）

7）清水俊(2007)「『責任という原理』における多様性の概念」（『熊本大学社会文化研究　5』pp. 145-54）

8）的場哲郎(1999)「ハンス・ヨナスにおけるハイデッガー哲学の意味」（『白鷗女子短大論集』No. 24(1), pp. 1－26）